生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか

前号（2015 年夏号）では、幼児期に育むべき力や姿勢としてOECD（経済協力開発機構）などが提唱する「社会情動的スキル」を特集しました。社会情動的スキルは、日本では「非認知能力（スキル）」と呼ばれ、今後、幼児教育の中で意識的に育成することが求められるようになります。園での保育の中に「非認知能力」を育てる活動をどう取り入れると良いのかを考えてみましょう。

インタビュー

支援の「発想」を転換すれば日常の遊びや生活の中で十分に育つ

人が生涯に渡りのびのびと学び、成長を続けていくのを支えるのが、幼児期から育む「非認知能力」です。園では、どのような学びやサポートによって「非認知能力」を伸ばせるのでしょうか。無藤隆先生が保育の現場の実例を交え、ポイントを解説します。

欧米を中心に世界中で注目される「非認知能力」

「非認知能力（スキル）」は、これからの幼児教育のキーワードになるでしょう。内閣に教育の提言を行う教育再生実行会議では、幼児教育の無償化や幼児教育アドバイザーの導入などさまざまな議論が進められていますが、非認知能力の育成は中心的なテーマのひとつです。平成 30 年度より実施予定の幼稚園教育要領や保育所保育指針には、非認知能力に関わる内容が多く盛り込まれるはずです。

非認知能力は、ＯＥＣＤでは社会情動的スキルと言い表されます。ＩＱなどで数値化される認知能力と違って目に見えにくいのですが、「学びに向かう力や姿勢」とも言い表せるでしょう。目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢が中心になるとお考えください。

近年、非認知能力は日本だけではなく、世界中で研究が進み、その重要性が認識されています。とりわけ議論が盛んなのは欧米です。というのも、従来、欧米の幼児教育は読み書きや思考力などの知的な教育が中心でした。しかし、幼児期の知的教育の効果は一時的なものに過ぎず長続きしないことが明らかになり、認知能力の土台となる非認知能力がクローズアップされてきているからです。加えて、非認知能力は幼児期から小学校低学年に育成するのが効果的という研究成果も注目されています。

白梅学園大学教授
無藤　隆
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。『幼小接続会議』座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『保育の学校（全3巻）』（フレーベル館）など。

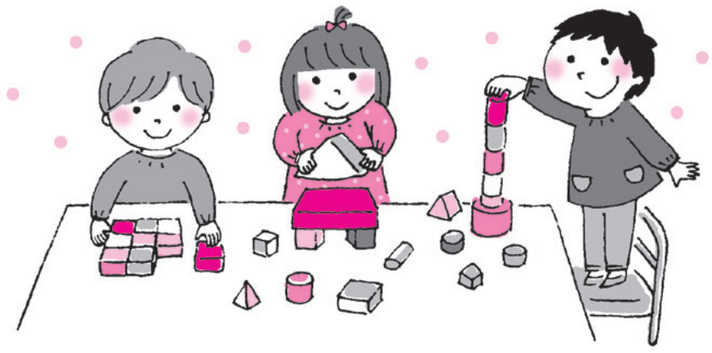
3つの課題を克服すれば「非認知能力」は育つ

一方、日本は欧米とは少々異なる文脈で非認知能力の必要性が論じられています。知的教育に重点を置いてきた欧米とは違い、日本の幼児教育は「心情・意欲・態度」を大切にすることで、非認知能力を育成してきたと言えます。しかし振り返ってみると、いくつか課題が見えてきます。

ひとつは、日本では特に意欲や興味・関心を大切にしてきましたが、非認知能力の重要な要素である粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成はそれほど重視されていませんでした。

ふたつめとして、認知能力と非認知能力は絡み合うように伸びるという認識が弱かったと思います。どういうことかというと、意欲や関心をもって粘り強く取り組むと、自然に深く考えたり工夫したり創造したりして認知能力が高まります。そのように認知能力が発揮された結果、達成感や充実感が得られ、「次もがんばろう」と非認知能力が強化されます。こうしたサイクルを意識することで、認知能力と非認知能力は効果的に伸ばせるのです。

３つめとして、こうした姿勢や力は、従来、気質や性格と考えられがちでした。現在の議論では、これを「スキル」と捉えて教育の可能性を強調しています。例えば、子どもの興味・関心は保育者の環境づくりにより意図的に高められますし、粘り強さは励ますことで伸ばせます。あえて「スキル」と呼ぶことで、具体的な支援を通して子どもができるようになることを示しているのです。



こうした課題を踏まえ、もっと意識的に非認知能力を高めることが、今後の幼児教育では極めて重要になるとお考えください。

もっとも、幼稚園教育要領や保育所保育指針の考え方にのっとった園は、既に非認知能力を育てる基盤はととのっていると考えていいでしょう。ですから、全く新しい取り組みを導入するのではなく、非認知能力という観点から従来の保育を振り返って補完する視点をもってください。

豊かな環境や保育者の言葉が子どもの内面を育てる

続いて、非認知能力を育てる活動を充実させるための具体的なヒントを提示いたします。

現行の幼稚園教育要領と保育所保育指針でも、非認知能力の育成に向けた種はまかれています。例えば、協同的な活動は好例です。子どもたちが目標や意欲をもち協同する活動は、社会性が育ちますし、自分たちの考えを具体化するためには知的な工夫や粘り強さが求められます。既にこうした活動に取り組む園は少なくないでしょう。

さらに今後は次の３点に留意していただきたいと思います。

ひとつは、子どもがおもしろいと感じたり、関わったりしたくなる素材をふんだんに用意することです。こうした環境づくりは、園による差が大きいのが現状です。

例えば、積み木にはさまざまなサイズや素材があり、それぞれ遊び方は異なります。いろいろな種類を置くことで、遊びが広がりやすくなるでしょう。絵本も多くのジャンルにふれることで興味を喚起しやすくなります。

また、園庭にどのような葉っぱや花があるかによって、色水遊びの展開は変わります。さらにペットボトルや牛乳パックといった廃品を置いておくと、子どもが興味をもって自然と遊びが発生するはずです。

というように、環境を豊かにする方法はさまざまで、ひとつの正解はありません。それぞれの園の特性を生かして環境の充実化に努めてください。

ふたつめのポイントは、保育者が対話を通して、子どもの発想を豊か

にしたり考えを深めたりすることです。こちらも今は、保育者による個人差が大きいです。子どもに対する問いかけが不足していたり、一方的に言葉を提示するだけで対話になっていなかったりするケースが見られます。

実際の例ですが、ある園で子どもたちが水盤に厚い氷が張っているのを見つけました。ここで保育者が「良かったね」程度の言葉しかかけなければ、子どもはひと通り氷で遊んだり割ったりするだけで終わっていたでしょう。

しかし、保育者は対話を通して子どもたちから「お母さんや他のクラスの友だちにも見せたい」という言葉を引き出し、「どこに置いておこうか？」と問いかけると、子どもは話し合って日陰に置くことにしました。また、「明日も作りたい」という話になり、そのためにはどうすればいいかを考え始めました。

もともと子どもは、氷は寒い場所でできると直感的に知っていましたが、保育者との対話を通して明確に意識するとともに、氷への興味が高まって活動が広がったのです。

子どもが氷を見つけたのは「偶然」でしょうか。一見、そのようですが、これは「必然」と言えます。仮に子どもが水盤の氷を見つけなかったとしても、いつかは水たまりの氷や霜柱に気づいたはずです。子どもの育ちを捉え、「氷に興味をもつだろう」という見通しがあったからこそ、子どもの発想を広げる対話ができたのでしょう。言うなれば、子どもが気づくのを待っていたのです。逆に保育者が氷の存在を教えて一方的に活動の指示をしていたら、ここまで強い興味は示さなかったでしょう。

5歳児は「高度」な活動で小学校の学びにつなげる

３つめの要点は、小学校とのつながりを意識することです。といっても、小学校教育の先取りをするわけではありません。幼児期の学びを小学校以降の学習の土台と捉え、５歳児にふさわしい高度な活動を通して非認知能力を高める努力をしましょう。そのために、「しっかりと目当てをもって取り組んでいるか」「友だちと協力して進めているか」「力をもて余したり、遊びが停滞したりしていないか」といった視点から５歳児の活動を見直してみてください。

これまで幼小接続と言うと、小学校からの「こんな力を高めてほしい」といった要望を取り入れることが中心でした。しかし今後は、小学校側が幼児期の育ちを受け止めて発展させるという発想が大事になります。文部科学省も幼児期から大学までに一貫して資質・能力を育成するという方針をもっており、幼児期に培う非認知能力は、小学校以降の主体的な学びの土台と位置づけています。

小学校だけではなく、非認知能力は３歳前後の育ちにも大切なため、２歳からのつながりも意識したいところです。幼稚園の場合は入園前ですが、最近は子育て支援の場として園を訪れることも少なくありません。そうした機会も活用して子どもの育ちを捉えたり、家庭の状況を把握したりして、年少クラスの前半から非認知能力を意識した活動を展開することが望まれます。

支援を工夫すれば特別な環境や活動は必要ない

非認知能力を高める活動を検討する際は、「内容」よりも「育てたい姿勢や力」をベースに考えてください。必ずしも、特別な環境や活動は必要ありません。支援の工夫により、日常的な遊びや生活の中でも非認知能力は伸ばせます。

例えば、どの園にもある縄跳びや一輪車でも構いません。ただし、従来の保育からの発想の転換が必要です。「縄跳びが何回跳べるか」ではなく、「縄跳びを通し、何らかの目的をもったり、上手になるように工夫したり、根気強くがんばったりするか」などと非認知能力に重点を置いてください。子どもが非認知能力を発揮できるように支えた結果として、おそらく縄跳びのスキルも高まるでしょう。

ここで重要なのは、認知能力と非認知能力のどちらも、効果的に育成するためには、目標や意欲、関心が欠かせないことです。教室におとなしく座って先生の説明をじっと聞く活動だけでは、目標に向かうがまん強さや粘り強さは伸びません。

次にコマ回しの活動で考えてみましょう。意欲や興味を引き出すには、保育者が教えるより、年上の子どもが上手に回すのを見て憧れの気持ちを抱かせるのが効果的でしょう。なかなか回せない子どももいますが、ここでも保育者が手取り足取り教えるのは良くありません。他の子どもの姿を見て工夫したり、粘り強く練習したりする姿勢を引き出せば、非認知能力は伸びやすくなります。

数や文字の力も、非認知能力とともに高められます。

ある園では、園庭でかけっこの往復をする際、何往復したかを忘れないように、10 個の牛乳パックを用意し、その中にひとつずつおはじきを入れていました。この活動では、走る力やがんばる力などを高めると同時に、10 を単位とする数を自然と学べます。

文字に関しては、お店屋さんごっこでメニューや看板などを作成したくなることがよくあります。文字が書ける子どもが作成したり、まだ書けない子どもが書ける友だちに教わったりして自然と学んでいきます。保育者は、「もっと本物のお店らしくしたい」という気持ちを上手に引き出しましょう。

非認知能力を育てる支援と評価は表裏一体の関係です。きちんと評価できると支援の改善につながります。

非認知能力の評価は難しいのですが、園では具体的な活動を通して評価する方法が進めやすいでしょう。例えば、活動中の子どもの姿を文章や写真で継続的に記録し、「意欲的に取り組んでいるか」「工夫する力がどこに見えたか」などを検討します。一緒に子どもに関わる保育者が評価の基準を共有し、話し合う形にするとより客観的に捉えられるでしょう。そして不十分な点に対し、どのような支援をすべきかを考えます。

保育者の資質・能力を高める園内研修がますます重要に

非認知能力を育成したり、評価したりするためには、保育者が非認知能力について深く理解し、遊びや生活に見通しをもつことが欠かせません。これまで以上に保育者の資質や能力、経験が問われるようになります。そのため、保育者の研修がますます重要になります。

研修では、ビデオや写真などで具体的な保育の場面を共有し、意見を交わし合います。その際、「意欲を十分に引き出しているか」「認知能力とどうつながっているか」「保育者の関わり方は適切か」など、特に非認知能力の観点から検討を進めてください。こうした具体的な場面に基づいた研修を実践する園はまだ少ないですから、ぜひ取り入れていただきたいです。

大学などの保育者養成課程でも、非認知能力は重視されていきます。これまでもカリキュラムに含まれていましたが、今後はより具体的・分析的な教育が行われることになるはずです。

非認知能力は、理論を聞くと抽象的で難解な印象があるかもしれませんが、いったん感覚をつかむと難しいものではありません。試行錯誤を通じて一度でも子どもの中に非認知能力が育ったという実感を得られれば、その他の活動にもスムーズに応用できるようになるでしょう。

FOR 園長先生

「非認知能力」を育てるために園長先生に心がけてもらいたい３つのポイント

◎カリキュラム全体のマネジメントをしましょう

非認知能力の育成は、各年齢で連続した支援をすることがカギとなります。園長先生がカリキュラムの管理者として全ての子どもの年齢を見通した保育を検討してください。

◎保育室や園庭などの環境を見直しましょう

園環境の整備については、保育者だけでは判断できないことがあります。園長先生が保育者の意見を聞きながら、園環境の充実化に努めてください。

◎園内研修を実施しましょう

保育者の資質・能力を高めるためには、園内研修が不可欠。園長先生が率先して企画し、研修に対して積極的な姿勢を見せましょう。